

親への移行期におけるハッピーネスに影響する要因について

— 初産夫婦の妊娠後期と出産後2～4ヶ月時の関連について —

布原佳奈

I. はじめに

少子化の進む日本において、育児不安、育児ストレス、虐待が社会問題となっている。そのため、1980年代より育児不安・育児ストレスといったネガティブな心理面に焦点を当てた研究が数多く行われてきた。これらは母親を対象とした横断的研究が大部分であり、夫婦をシステムとして捉えた研究および同一夫婦の妊娠期と育児期の変化および関連を捉えた研究は少なく、親への移行期をうまく乗り切り、生活領域全体を肯定的に捉えている夫婦の特徴とその影響要因は明らかにされていない。本研究の目的は、同一夫婦に対して妊娠後期と出産後2～4ヶ月時に縦断的な質問紙調査を行い、①育児期の夫婦のハッピーネスに影響する妊娠期および育児期の要因、②育児期にハッピーネスが上昇した夫婦と下降した夫婦とを比較しその要因を明らかにすることである。

II. 方法

1. 調査対象者：妊娠期の対象者は、正常な妊娠経過である妊娠28週以降42週未満の妊婦とその夫、育児期の対象者は出産後2～4ヶ月の時点の同一夫婦
2. 調査方法：妊娠期の調査は、妊婦健診および母親学級に訪れた妊婦に質問紙を直接配布しその場で回収、もしくは郵送で回収した。夫には妻を通して依頼し、郵送で回収した。育児期の調査は、妊娠期の調査で研究協力について同意の得られた夫婦に質問紙を郵送し、郵送で回収した。
3. 調査期間：
妊娠期：平成13年12月～平成14年4月
育児期：平成14年4月～平成14年10月
4. 質問紙の内容：1) ハッピーネス尺度（植田，1992）
2) Marital Love Scale（菅原，1997）
3) 平等主義的性役割態度（鈴木，1994）
4) コーピング尺度（尾関，1993）
5) 地域住民用ソーシャルサポート尺度（堤，2000）（サポート源がある場合、得点が低いほどソーシャルサポートを得ていることを示している。）
6) 心理的負債感（相川，1995）
7) 特性的自己効力感尺度（成田，1995）
8) 家事分担に対する満足度
9) 育児分担に対する満足度
10) 夫の仕事・家事・育児の3側面におけるエネルギー配分
11) 分娩満足度
12) 既存の尺度を参考に自作した育児の否定面と肯定面およ

び育児サポートに関する項目 13) 妊娠期の基礎データ（年齢、結婚年齢、家族形態、子どもの数および年齢、最終学歴、職業、労働時間、居住年数）
14) 育児期の基礎データ（在胎週数、出生時体重、日齢、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期について入院や治療を要する異常の有無、産後の手伝いの期間）

妊娠期の妻には上記の1)～8) 13)、夫には1)～5) 8) 10)を、育児期の妻には1) 2) 8) 9) 11) 12) 14)、夫には1) 2) 8) 9) 10) 12) について回答を求めた。

III. 結果および考察

1. 質問紙の回収状況と分析対象者：妊娠期の調査では388組に配布し、288部回収した（回収率は74.2%）。育児期の調査は273組に郵送し、181部回収した（回収率66.3%）。分析対象は、2回の調査共に有効回答の得られた夫婦142組の内、初産の84組である。
2. 対象者の背景：妻の平均年齢は29.6±4.2歳、夫では31.1±6.4歳であった。核家族が83.3%であった。在胎週数は平均33.9±2.5週、児の生下時体重は平均3055.6±304.4gであった。育児期の調査時点では、出産後平均94.9±11.6日であった。
3. ハッピーネスについて：1) 因子構造：妊娠期、育児期別に夫婦84組計168名のデータを因子分析した結果、いずれも4因子抽出された。第I因子を「積極な将来展望」、第II因子を「充実感」、第III因子を「自己肯定感」、第IV因子を「ストレスバッファ」とした。以上4因子は、植田らの原尺度の因子構造とほぼ同様であった。
2) 妊娠期と育児期の変化：ハッピーネス総得点の平均は、妊娠期の妻40.67±6.58点、夫41.56±6.79点、育児期の妻41.64±6.25点、夫41.74±6.65点であった。妊娠期と育児期のハッピーネス総得点の平均値の差は、妻、夫ともに有意ではなかった。
3) 妊娠期と育児期との関連：妻では $r=0.634$ 、夫では $r=0.608$ と比較的強い関連がみられた。妻と夫のハッピーネスは、出産という大きなライフイベントを経ても比較的安定していた。Diener (1984) は「幸福感はある程度気分によって変動するが、長期的には $r=0.55\sim 0.70$ の信頼性がある」と報告しており、本研究においても同様な結果であった。

4) 妻と夫との関連：妊娠期における妻と夫のハッピネス総得点の相関 ($r=0.156, NS$) は有意ではなかったが、育児期では有意な正の相関がみられた ($r=0.331, p<0.01$)。妻と夫のハッピネスは妊娠期には独立であったが、育児期には子どもを育てるといふ夫婦共通の課題を有するため相互に影響すると考えられた。

4. 育児に関する項目について：妻の育児に関する36項目について因子分析を行った結果、7因子が抽出され、第I因子を「夫の育児サポート」、第II因子を「育児拘束感」、第III因子を「育児肯定感」、第IV因子を「家族の育児サポート」、第V因子を「母親としての有能感」、第VI因子を「育児不安」、第VII因子を「友人の育児サポート」とした。夫の育児に関する21項目について因子分析した結果、5因子が抽出され、第I因子を「育児拘束感」、第II因子を「育児肯定感」、第III因子を「父親としての有能感」、第IV因子を「育児不安」、第V因子を「育児負担感」とした。因子間の関連をみると、「育児肯定感」が高い妻は、「母親としての有能感」が有意に高く ($r=0.438, p<0.01$)、「母親としての有能感」は「父親としての有能感」と有意な正の

相関があった ($r=0.227, p<0.05$)。「父親としての有能感」の高い夫は、自分自身の「育児拘束感」 ($r=-0.351, p<0.01$) および「育児不安」 ($r=-0.268, p<0.05$) が有意に低く、育児肯定感が高かった ($r=0.373, p<0.01$)。

妻が育児に対して肯定的な状態であると、配偶者である夫も育児拘束感や育児不安が低く、親としての有能感が高い状態であったことから、夫婦ともに育児に適応的な場合と夫婦ともに適応的でない状態が存在する可能性が考えられた。

5. 育児期のハッピネスに影響する要因：ハッピネスの促進要因および抑制要因を明らかにする目的で、4サブスケールを従属変数として重回帰分析を行った(表1~表10)

妻のハッピネスに対する正の影響要因をまとめると、「妻の Marital Love Scale」「妻の特性的自己効力」「妻の積極的なコーピング」「母親としての有能感」「妻へのソーシャルサポート」「新生児の育児分担満足度」「分娩満足度」であり、負の影響要因は「妻の育児拘束感」であった。一方、夫のハッピネスに対する正の影響要因をまとめると、「夫の Marital Love

表1 育児期 妻 ハッピネス総得点 n=84

	B	β	t	p
育児期 妻 Marital Love scale	0.307	0.433	5.101	0.000
妻 育児拘束感	-0.611	-0.417	-4.920	0.000

調整済みR2乗=0.474

表2 育児期 妻 積極的将来展望

	B	β	t	p
育児期 妻 Marital Love scale	0.111	0.413	4.816	0.000
妻 情動焦点型コーピング	0.406	0.338	3.799	0.000
妻 問題焦点型コーピング	0.181	0.225	2.529	0.013
分娩満足度	0.511	0.194	2.273	0.026

調整済みR2乗=0.434

表3 育児期 妻 充実感

	B	β	t	p
母親としての有能感	0.631	0.433	4.962	0.000
妻 育児拘束感	-0.238	-0.388	-4.454	0.000

調整済みR2乗=0.413

表4 育児期 妻 自己肯定感

	B	β	t	p
妻 特性的自己効力	0.052	0.415	4.435	0.000
育児期 妻 Marital Love scale	0.058	0.313	3.342	0.001

調整済みR2乗=0.283

表5 育児期 妻 ストレスバッファ

	B	β	t	p
育児期 妻 育児分担満足度	0.645	0.401	4.582	0.000
妻 友人からの育児サポート	0.195	0.328	3.664	0.000
妻 家族からのサポート	-0.037	-0.245	-2.735	0.008

調整済みR2乗=0.368

表6 育児期 夫 ハッピネス総得点 n=84

	B	β	t	p
育児期 夫 Marital Love scale	0.300	0.391	4.330	0.000
育児期 父親としての有能感	0.819	0.272	3.022	0.003
夫 問題焦点型コーピング	0.535	0.265	2.984	0.004

調整済みR2乗=0.363

表7 育児期 夫 積極的将来展望

	B	β	t	p
母親としての有能感	0.432	0.306	3.347	0.001
夫 情動焦点型コーピング	0.380	0.302	3.315	0.001
育児期 夫 Marital Love scale	0.086	0.294	30.94	0.003

調整済みR2乗=0.366

表8 育児期 夫 充実感

	B	β	t	p
夫 妻からのサポート	-0.354	-0.408	-4.478	0.000
母親としての有能感	0.366	0.273	3.011	0.003
夫 育児拘束感	-0.255	-0.252	-2.774	0.007

調整済みR2乗=0.320

表9 育児期 夫 自己肯定感

	B	β	t	p
夫 家族友人からのサポート	-0.124	-0.400	-4.268	0.000
夫 育児拘束感	-0.276	-0.386	-4.125	0.000

調整済みR2乗=0.274

表10 育児期 夫 ストレスバッファ

	B	β	t	p
夫 妻からのサポート	-0.170	-0.352	-3.876	0.000
夫 育児拘束感	-0.180	-0.319	-3.525	0.001
母親としての有能感	0.212	0.285	3.151	0.002

調整済みR2乗=0.324

Scale)「父親としての有能感」「夫へのソーシャルサポート」「積極的コーピング」および「母親としての有能感」であり、負の影響要因は「夫の育児拘束感」であった。妻の場合は、妻自身の認知が自分のハッピーネスに影響するのに対し、夫の場合は、「母親としての有能感」といった配偶者の自己認知もハッピーネスに影響していた。

Ryan&Deci (2001) は自律、有能感、関係性の3つの心理的ニーズを満たすことは well-being を促進するとしている。育児期においては、「親としての有能感」は well-being の促進要因に、「育児拘束感」は自律や他者との関係性を妨げる要因として影響していると考えられた。

6. 育児期にハッピーネスが上昇した夫婦の特徴：妊娠期

のハッピーネス総得点と育児期のハッピーネス総得点の差をとり、夫婦共に育児期にハッピーネスが上昇した群(20名)と下降した群(12名)に分けた。ハッピーネスが上昇した夫婦は、結婚期間が平均30.45ヶ月と長く、結婚後2～3年程度経過し、夫婦2人での生活が心理的にも経済的にも安定した状態で第一子を迎えたと考えられる。夫は平均33.4歳であり下降群に比べて5歳以上高く、大卒以上の学歴があり、平等主義的性役割態度をもっていた。そして、夫の育児拘束感が低く、妻の母親としての有能感が高い傾向にあった。「夫の育児拘束感」と「母親としての有能感」は、ハッピーネスサブスケールの有意な要因であったことから、夫婦を単位としてハッピーネスを考えた場合も、特にこの2変数が重要であるといえた。